

ナンバの岩

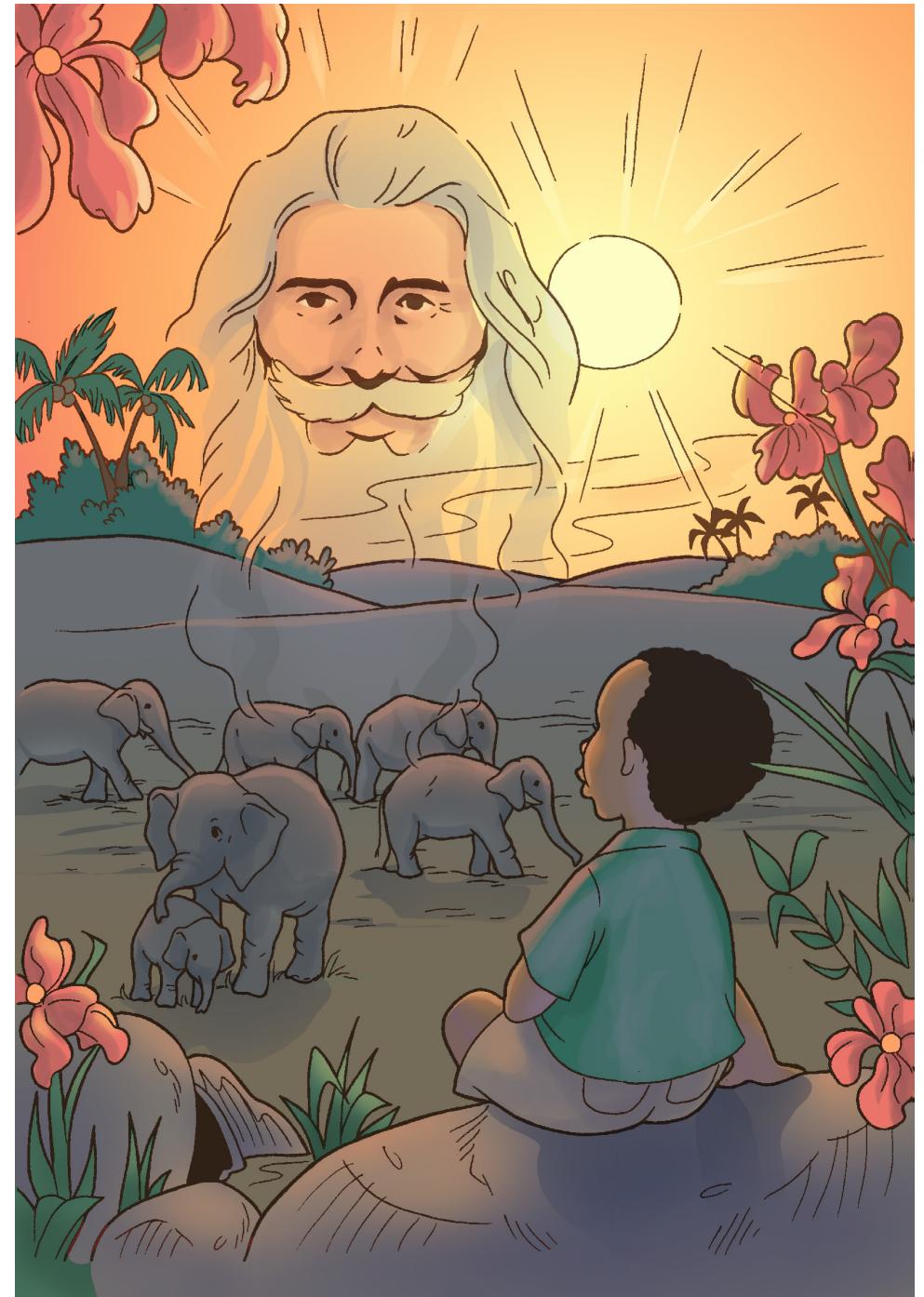
いわ

まいにち ゆうがた ななさい だいそうげん み お いわ
毎日 夕方になると、7歳になるナンバは、大草原を見下ろす岩の
うえ く みぎて め まえ ひだりて み わた かぎ
上に来る。右手には ジャングルが、目の前と 左手には、見渡す限り
だいそうげん ひろ
大草原が 広がっていた。

ナムバは、はるか 下の方に 見える 野生動物を ながめるのが 大好き
した ほう み や せいいどうぶつ だいす
だった。今日は、象の 群れが 草を 食べている。一頭の 小象は 母象の
きょう ぞう む くさ た いittōう こ ぞう ははぞう
はなと じやれて あそ ぞう みみ おお
遊んでいた。象の 耳は、まるで 大きな うちわのよう
ゆれながら、ゆっくりだが 堂々と 進む 巨体を あおいでいた。

ゆう ぐ どき だいす じ かん おお きんいろ たいよう
夕暮れ時は、ナンバの大好きな 時間だ。大きな 金色の 太陽が
ち へいせん む はじ そら えいこう み いろ はな はじ
地平線の 向こうに しづみ始め、空が 栄光に 満ちた 色を 放ち始めると、
むね ことば い こうふん み
ナンバの 胸は、言葉では 言いつくせない 興奮で 満たされる。

ひ くもひと かいせい うつく きんいろ かがや
そら 空いっぱいに 広がり、その 真ん中に、太陽が 目に 見えない 糸で
ひろ ま なか たいよう め み いと
ぶら下がっているかのようだ。あざやかに 光を 放つ、完ぺきな 球体。
ち へいせん む がわ ようす ちきゅう
それが 地平線の 向こう側に しづんでいく 様子は、まるで 地球に
の 飲みこまれていくようだ。

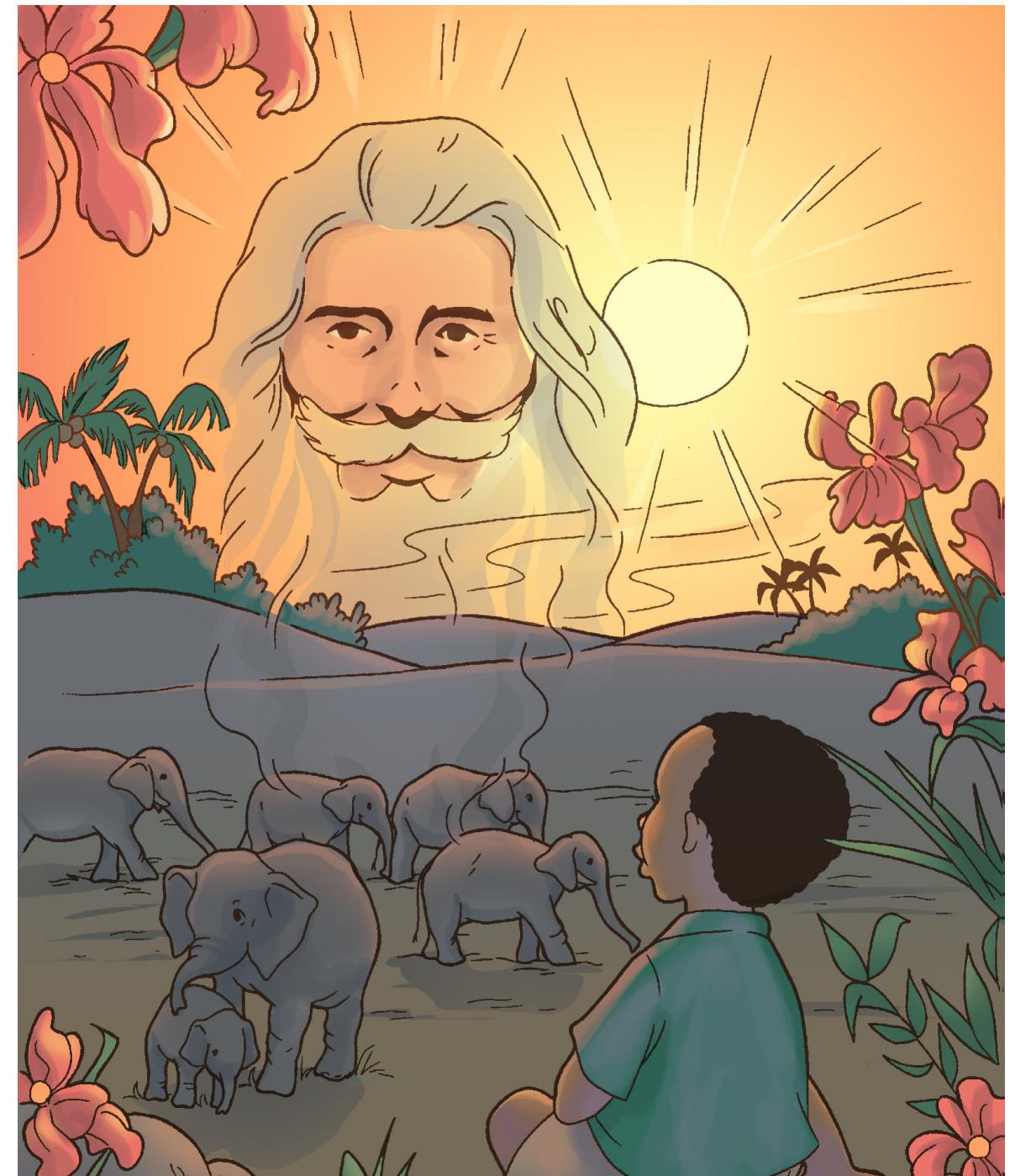


なんどみきに来ても、日没はナンバにとって、いつも特別だった。空に広がるすばらしい色をながめ、大草原が静けさに包まれるのを見ると、神への愛をいっぱいに感じる。この瞬間には、動物さえもが偉大な創造主である神に敬意をはらって、おしゃべりをやめるかのようだ。

静かにすわっていると、今にも創造主が自分に語りかける声が聞こえてきそうな気がする。ナンバは、夕方の新鮮な空気を胸いっぱいにすいこんだ。その瞬間、ナンバは偉大なる創造主に語りかけたいという思いにかられた。

金色の太陽が地平線の向こうに消え去って空がピンクになり、そして紫色に変わると、ナンバは大草原に向かって声を上げた。「神様、そこにおられるのですか？あなたはどなたですか？」

すると、とてもおどろいたことには、声が返ってきたのだ。それは、まるで風の音のように静かな声だった。「そう、わたしはここにいるよ。わたしは、偉大なる宇宙の創造主だ。わたしは太陽を造り、月を造り、星を造った。すべての植物と動物、それに、君も造ったんだよ。君を愛している。そして、気づかっていよい！君を見守っているからね。もし立ち止まって耳をかたむけるなら、わたしはいつでも君に話しかけるからね。」



ナンバの心臓は興奮で高鳴った。偉大な創造主が
自分に話しかけてくれるなんて、夢にも思って
いなかった。ナンバはほほえんだ。とても愛されて
いるように感じた。「神様、あなたがくださった
すべてのおくり物を感謝します。太陽と月と星を
感謝します。」

上を見上げると、太陽がしづんだ後の空には、
一番星がキラキラと輝いている。

「大草原を感謝します。ジャングルも感謝します。
動物たちやすずしいそよ風を感謝します。それから、
ぼくを造ってくださったことも、感謝します！」

ナンバは立ち上がって、足をのばした。1時間以上も
じっとすわっていたのに、すばらしい時間はあっと
いう間に過ぎ去ったかのように感じられた。

家へ帰る前に、ナンバは今一度、大草原の方に
ふり返って神にささやいた。「すわってあなたの
創造物をながめ、あなたに話しかけられるこの岩も、
感謝します。じゃあ、また明日！」

そうささやくと、ナンバは家族といっしょに
夕食を食べるため、家に向かって一目散に走った。



作者不明 絵:サン德拉・レイン デザイン:ロイ・エバンス

出版:マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2020年、ファミリーインターナショナル
“Namba’s Rock”--Japanese 関連の読み物はこちら ⇒ 子供のための物語、被造物、神、イエス様との関係